【論文】

国境を超えるシニアの学び：University of the Third Age運動の国際展開[1)]

木　下　康　仁

はじめに

本稿の目的は、シニアを対象とする教育・学習活動の国際的展開の現状を概観し、その課題と可能性、とくに日本への示唆を検討することにある。生涯教育、社会教育の領域においては、国際的にもシニアをおおむね50歳以上とするのが一般的であるため、ここでも同様とするが、実態としてはリタイア後の高齢者が中心である。国際的には既存の大学の主導的役割を重視するフランスモデルとシニアの自律的学習活動を理念とするイギリスモデルがあり、前者は発祥の地であり当初のモデルを代表するものであり、後者は市民シニアの実際の活動が国際的にもっとも成功している例である。第二次世界大戦後もっとも成功している社会運動と言われているイギリスモデルに関しては別に論じているので（木下、2018）、ここではフランスモデルに立脚した国際的な展開について取り上げる。

1　University of the Third Ageの発祥

University of the Third Age（U3A）と呼ばれているシニアの学習活動は、1973年にフランスのツールーズにある社会科学大学の法経済学部ピエール・ヴェラス（Pierre Vellas）教授の発案で始まった。既存の大学が開始したシニア向けの学習プログラムで大学教員たちが講師を務め、また、老年学の研究にも協力してもらうなど大学が独自資源を活用する方式であった。フランスでの成功とヨーロッパ諸国での展開を踏まえ、ヴェラス教授は1975年にプログラム提供側の大学と受講者側がともに参加し様々な交流を促進するために国際組織、Association Internationale des Universites du Troisieme Age（AIUTA）、英語名International Association of Universities of the Third Ageを設立した（本稿では国際的に用いられているフランス語表記のアルファベットAIUTAで統一し、また適時「U3A国際協会」と表記する）。

現在では規模の大小を問わず、また、世界的にも多くのU3Aが独自のホームページをもっており、そこには必ずU3Aの発祥についての情報が記載されている。おおむね似通った内容でごく簡単なものが多く、エピソード的である。

その中でもっとも信頼性が高いと考えられるAIUTAのホームページでは以下のように説明されている[2)]。

> 最初のU3Aはフランス、ツールーズの社会科学大学において設立された。同大学、法経学部教授Pierre Vellasが、第三期の人々third agersに向けて、この年齢層の条件や必要性や抱負にみあった活動プログラムの提供を構想したことによる。
>
> 講義や身体運動/体操などの内容で最初は控えめに始まったが、まもなく教室は受講者でいっぱいとなった。高齢者も、知識、身体や健康、文化について共通の関心をもち、意欲を満たすことで社会的、心理的に発達することを経験していた。
>
> これをモデルに、ほどなく高齢者のためのこの種の大学がいくつか設立された。

この運動が急速に拡大しUTA、第三期大学の数が増加していったのは、まずフランスにおいてであった。そして、ベルギーに続き、スペイン、スイス、ポーランド、カナダ、スウェーデン、イタリア、アメリカ合衆国、英国、ドイツ、さらに南アメリカ、アフリカ、アジアへと広がっていった。

そこで、Vellas教授は、この種の大学のすべてのプログラム提供者と利用者の情報共有と交流の場としてAIUTAを設立し、そこに経験と実践と研究をつなぐセンター機能をもたせた。

Based on Roger Bernier（Sociology and Society, vol XVI）

Translated by S.H. Miller

この内容からもわかるように、現在のところU3Aの発祥に関する公式な情報源はAIUTAとみるのが妥当であろう。筆者が調べた限りでは、発祥についての記事で出典明示をしているのはこのサイトだけである。もっともU3A国際協会（AIUTA）がU3Aの発祥について他からの引用を必要とするというのは奇妙にも思えるが、歴史的な正確さのためであろうか。

その一方で、他のホームページ等では発祥についてもう少し詳しい説明も散見される。例えば、オンラインによる国際U3Aネットワークである World U3A の説明では以下のようになっている[3)]。「最初の第三期大学」と題するVellas教授本人の写真の入った頁があり、署名があるからこれは教授自身が書いたものと考えられる。

最初の第三期大学

Pierre Vellas

ツールーズにおけるU3Aの創設は1973年2月、教育・研究部門運営協議会に提案された。提案者は、教授、学生、職員の代表であり、これに国際的に重要な任務を担う組織から3名の外部メンバーが加わった。WHO（世界保健機構）とILO（国際労働機関）とユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の副事務局長たちであった。

将来的な高齢者の急増を見越し、この大学が高齢者の生活の質の改善に何ができるかを、一切の予見をもたずに実際の経験から探求するのが目的であった。通常とは大きく異なる性格のプログラムであったにもかかわらず、特別な予算措置はとられなかったもののこの提案は同運営委員会において全会一致で採択された。

4つの主な目的が確認された。

1. 高齢者の身体的、精神的、社会的な健康と生活の質の水準向上に貢献する。これには、体操や運動、精神的活性化、社会の動きへの関心の啓発、社会的関係、自身の出身背景の知識、芸術的創造性、他者への手助けが含まれる。
2. 高齢者のための永続的な教育プログラムを、他の年齢集団との密接な関係のもとで提供する。これには、音楽、芸術、民俗学、詩や演劇、そして、学術的テーマ科目が含まれる。
3. 高齢化に関する諸問題への調査研究を率先する。
4. 個人だけでなく社会一般に対しても高齢化諸問題についての認識向上を働きかける目的で、老年学/ジェロントロジーの教育プログラムを、コミュニティ情報プログラム担当部署を含め、現在および将来の重要事項決定関与者向けに立ち上げる。

U3Aのプログラムは世界中で大きな成功をおさめた。このことは、人類の歴史上初めて出現した高齢化社会の中で、静かに広範囲で沸き起こりつつある必要性に対してこれらの教育プログラムが的確に対応するものであったことを示している。

World U3Aは最近形成された、ウェブ上でのコミュニケーションを中心とするネットワークであるから、この文章がVellas教授自身によるものだとしても時期的にはかなり以前に書かれたものと考えられるが、残念ながら執筆の時期や出典は提示されていない。ただ、提案の経緯などは中心的当事者でなければわからない内容である。しかし、現状においてU3Aの発祥を伝えるべき最も正統な組織であるAIUTAの内容（上記引用）と比べると、この内容こそAIUTAのホームページにふさわしいと思われるのでちぐはぐな印象をぬぐえない。

一方、ツールーズでの最初の様子について詳しく説明しているのは、シンガポールU3Aである[4]。Vellas教授が退職した人たちを対象に、講義、コンサート、ガイド付ツアー、その他の文化的活動からなるサマースクールを実施し、この成功が引き金になって同種の活動がフランス国内で広がっていったという。さらに、ベルギー、スイス、スペインなどのヨーロッパの国々でも同様の活動が始まっていったと言われている。

2　U3A国際協会（AIUTA）の特性

この国際協会はU3Aの活動を国際的に推進することを目的に1975年6月にフランスで設立された国際機関であるが、先行する国内事情としてフランスでは1969年に生涯教育の推進が法律によって大学の責任とされ、1973年に最初のU3Aがツールーズで設立されたという流れになる。

この国際協会の目的は、名称や形態にとらわれず生涯学習を展開している組織や団体が参加し相互の交流をはかる国際的な枠組みの提供であり、啓蒙、啓発に力を入れている。WHO、ILO、ユネスコといった国際機関が設立に関与したということから想像されるイメージとはかけ離れ、組織的堅苦しさのない、相互の交流と親睦のための緩やかなネットワークである。形態や名称にこだわらずシニアの学習活動とそのための機会の拡充を世界的に推奨している活動体である。

加盟資格も非常に柔軟で、国の代表組織でもよいし地域で活動している個別のU3Aとしてでもよいし、さらには個人であってもよいとされる。こうした柔軟さは加入数の拡大につながるように思えるが、実態はそうとはいえない。2015年時点で、加盟主体は連合組織体として6団体（イタリア2団体、中国、オランダ、ナイジェリア、英国から各1団体。英国は全国組織Third Age Trust）、25か国からの45の個別U3A、そしてごくわずかな個人加入者という構成である[5]。個別のU3Aの加入内訳をみると多い順に、フランスがツールーズを含め8か所、イタリアが7か所、ドイツとスペインとスイスがそれぞれ3か所となっている。加盟主体の世界的分布では、圧倒的にヨーロッパ諸国が多く、他の地域では中南米から4か所、北米はカナダの1か所のみでアメリカ合衆国はゼロ、アフリカはセネガルの1か所とナイジェリアの連合組織1団体のみ、アジアではシンガポール（後述）と日本（同じく後述）の各1か所と、中国を代表する1団体という構成である。

加盟数の背景にある実際のシニア参加者数でみていくと、U3A国際協会のもう一つの偏りがみえてくる。中国である。中国は老人大学の連合組織が加盟しているが、実態ではその傘下に60,867ケ所の老人大学と764万人強の学習者数という圧倒的規模を誇っている[6]。中央政府の強力な指導のもと、『教育法』と『老年人権益保障』という二つの法律に基づき2016年以降具体的な政策展開が進められている。中国の試みはそれ自体として重要な研究テーマとなるが、ここではごく簡単な指摘にとどめる。

中国に次ぐ規模はイギリスで、加盟している全国組織Third Age Trustは1,000か所の個別U3Aと総数40万人の会員を代表している。シニアの学びである点は共通していても、中国とイギリス、そして、他は小規模であるが、これらの加盟主体の間では規模の極端な違いだけでなく、理念や組織形態、運営実態などで非常に多様である。こうした加盟状況のアンバランスは、人口の高齢化が先進諸国で先行してあらわれ今後グローバルな現象となっていくというマクロな視点にたてば加盟規模と地域的偏りは過渡期の特徴と考えることもできよう。いずれにしても、こうした多様性を包含しつつ世界的にU3A活動を推奨し、相互の親睦と交流の促進のために活動しているのがU3A国際協会である。

なお、同協会の年会費[7]は、個別のU3Aでの加盟の場合その会員一人当たり0.175ユーロ（約21円、1ユーロ＝118円換算）に人数を乗じた額で、かつ最低で175ユーロ（約20,650円）、最高

上限年会費は1,750ユーロ（約206,000円）である。この会費幅は要するに1,000人から10,000人の規模で設定されているが、大多数はこの幅に収まるということではないかと推測される。1,000人以下であってもそれほど負担にはならないレベルであるし、10,000人以上であっても不公平感なく支払える額といえよう。一方、単体としてのU3Aではなくその連合組織としての加盟主体に対してはこれと類似の方式というあいまいな表記であるが、おそらくは将来的な増額への調整可能性を残してという含みであろう。現状では700万人を超える中国のような巨大規模であっても連合組織での加盟なので上限額1,750ユーロでよいことになる。

もう一つの加盟カテゴリーである個人の場合は25ユーロ（約3,000円）である。なお、イギリスの全国組織Third Age Trustが設置した国際委員会の報告書には、連合組織の場合2017年からは650ユーロ値上げされて2,420ユーロ（約290,000円）になるという記述がある（McCannah, 2015）。

U3A国際協会（AIUTA）の運営体制であるが、18か国からの27名で構成される運営理事会が中心となって活動しているが、加盟主体数50強に比べ理事会の構成比重が格段に大きく、全体を代表するというよりも理事会自体が実質的活動を担っているように思われる。27名のうち、理事が複数入っているのはフランスとスペインの各3名、イギリス、イタリア、中国が各2名で、全体としてはヨーロッパ諸国、アメリカ大陸（北・中・南）、アフリカ、アジアと地域的バランスは考慮されている。イギリスの全国組織Third Age Trustは2名の理事を出していたが、現在は1名である。U3A国際協会の理事長は4年任期で理事の互選により選出されるが、2011年にツールーズ大学の国際観光業経済学が専門のFrançois Vellas 教授が選ばれ再選され現在に至っている。同教授は、最初のU3Aを創設したVellas教授の息子である。

U3A国際協会の活動の中心は年に二回開催されている国際会議で、理事が持ち回りで開催地を引き受けている。もともとU3A活動にかかわっている人々の交流と親睦を目的としているのでその点では、国際会議が会員の親睦会的集まりであることは自然ではある。

年二回の国際会議のアジェンダはフランスモデルを反映した多様な構成となり、例えば観光学、エイジングなどの専門的研究テーマと関連したものが多くなっている。とくにシニア、第三期の人々を対象として観光、ツーリズムがこの協会（AIUTA）の企画で際立っていて、国際的な相互訪問や交流の促進と関係してはいるものの、現理事長の専門分野を色濃く反映している。2016年の会議テーマは「世界におけるU3Aの歴史と発展」（フランス開催）と「アクティブで健康的なエイジングと国際協力」（大阪開催）であった。

イギリス型U3Aモデルへの関心は高くない。国際協会側からみると、理念、内容、実績のほぼすべての面で圧倒的といえるほどの存在であるイギリスモデルは存在感が薄い。イギリスでの活動が世界的に十分知られていないためともいえるが、各国の事情を勘案すると例えば政府の支援を抜きにはできないため、政府の支援を受けず自律的運営を主軸とするイギリスモデルは参考にしにくい面は否めない。少し補足しておくと、U3A国際協会への加盟目的をイギリスモデルの国際的普及におく全国組織Third Age Trustにとってこれは悩ましい状況で、加盟の存続是非の問題につながっている。Trust理事会の委嘱を受けた国際委員会の2015年の諮問答申は、国際協会への派遣代表枠を二名から一名に減らすこと、また、その代表は今後はTrustの理事をもってあてるとする内容であった。

イギリス側からみた国際協会（AIUTA）との関係の問題とは別に、協会理事会においても現状の課題は認識されているようである。先にみたように、この協会はWHO、ILO,それにユネスコの支持を受けて組織されたのであるが、近年では国

連が支援するプロジェクトとの連携を強化することで発展途上国を中心にグローバルな展開を目指そうとしている。その具体策として「AIUTA-U3A憲章」が2014年6月に策定された。それに先立つ約一年半前に、次に述べるアジア太平洋地域に限定してU3Aの連携強化を目的とする自然発生的ネットワークの覚書が発表され、地域的な活動の動きが起きてきたことへの対応とも考えられる。つまり、U3A国際協会の活動があまりにも内輪の親睦会的なものであることへの飽き足りなさ、不満が活動実績のある加盟団体が多くなっているアジア太平洋地域でみられるようになってきたと考えれる。そして、この背景にはイギリスモデルに親和的なオーストラリアやニュージーランドなどのオセアニアやシンガポールといったイギリス連邦諸国の影響がみられる。

憲章は、以下の10項目からなる[8)]。

University of Third Age　憲章（U3A国際協会）

1（目的）U3Aは、学術的かつ社会的文脈において知識と文化を分け与える。

2（使命）U3Aは、高齢者（seniors）の文化的および社会的向上、並びに、彼らの健全な生活の増進に取り組む。

3（公共性）U3Aは、年齢、資格、経済状態にかかわらず、すべての高齢者に開かれている。

4（社会的位置づけ）U3Aは、活動の学術的位置づけを保証する。すなわち、多くのU3Aは既存の高等教育機関との統合あるいは連携を保っており、他方、他のU3Aは独自に教育的位置づけをしている。

5（教育）U3Aは、大学で教授されている広範囲の学術テーマについて学科目、会議、ワークショップを提供し、また、当該地域での関心事項に関するテーマの学習機会も多く提供する。

6（健康）U3Aは、社会的、知的/精神的、身体的活動の革新的形態により高齢者の健康増進をはかる。

7（文化）U3Aは、高齢者に向けて、変貌する社会をよりよく理解できるツールを提供する。

8（倫理）U3Aは、差別一般、とりわけ年齢、性別、民族背景、宗教に関するあらゆる形態の差別の軽減をめざし、また、差別による排除に対して積極的に反対する。

9（国際）U3Aは、世界の各地域における高齢者の国際的学術協力のための媒体であり、その一環として相互の訪問や交流を推奨する。

10（将来）U3Aは、アクティブ・エイジングに向けて知的/精神的、および身体的/物理的諸条件の提供により、平均寿命の伸長に貢献する。

発祥の地ツールーズで2014年に開催された理事会で承認されたこの憲章は、原点回帰を印象付ける内容である。第三期の人生段階にある人々、つまり、third ageの人々の学びと教育について、学術性、アカデミックさが強調されており、既存の大学との緊密な関係が重視されている。むろん、それ以外の活動が排除されているわけではないが、U3Aのほかに主体として言及されているのは既存の高等教育機関、すなわち大学である。この背景には、U3A国際協会、AIUTAが主要国際機関の支持を受けて設立された点を強調することで、今後高齢化を経験することになる発展途上国も含めてU3Aの意義と可能性を国際的にアピールしていく方針が読み取れる。そして、この憲章で直接語られていないが現実的には重要な役割を期待されている主体がある。政府とその支援である。形態や名称の如何を問わず、シニアによる学習を推進するAIUTAの設立理念は、各国の政府が高齢化対策の一環として課題とするところと基本的に重なるのであって、国内事情に応じてではあれ金銭面を含めさまざまな支援が政府に期待されている。したがって、学術性を前面に既存の大学との関係を軸におきながら、政府との関係も今後重視されていくものと考えられる。

言うまでもなく、こうした国際協会の方向は、政府からの運営費の補助は自主的活動の制約となることを危惧し、学術性よりは参加者たちの知的関心を重視し、Laslettのテーゼともいうべき「教える者も学び、学ぶ者もまた教えるthose who

teach shall learn, those who learn shall also teach」(Laslett, 1989/1991)という役割互換のダイナミズムにより自律的運営を行っているイギリス型U3Aを意識し、それとの差異化を意図している。また、U3A国際協会がこの段階で憲章を掲げた背景には、指摘したようにイギリス型U3Aを軸とする新たな国際的な展開が見られるようになってきたことが挙げられる。

3 アジア太平洋地域U3A連携(The Asia Pacific Alliance of U3As)

U3Aの国際化は近年新たな動きを見せており、特に注目されるのが2010年に設立されたアジア太平洋地域U3A連携(APA)である。インドで初めて開催されたU3A国際会議の終了時に、インターネットでのU3A活動を行っているWorldU3A(インドのハイデラバードに拠点事務所)の事務局長Tom Holloway氏の提案で参加者有志の集まりがもたれた[9]。お互い地理的に大きく離れて活動しているため、この状況をどう改善したらよいかが協議された。U3A国際協会は年二回の国際会議を中心に活動しているが、それではこの問題に対応できていないという現状認識が共有され、加えて国際組織ではあるがヨーロッパ中心、かつ、明らかにフランスモデルに比重がおかれていることも批判的な意味を込めて指摘された。すでに、オーストラリアやニュージーランド、南アフリカではイギリス型U3Aがモデルとして採用されており、インドはどちらとも異なる独自のモデル化を志向している中で、地域的距離を越えてより緊密なコミュニケーションを図る必要性が確認され、アジア太平洋地域に新たなU3A組織を設立しオンラインでの電話会議を定期的に開くことが合意された。APAの始まりである。オーストラリア、南アフリカ、インド、シンガポール、ネパール、日本のU3A、それに、インターネットでの活動をしているU3A Online とWorld U3Aが参加している。最後の二つのU3Aは、地理的障壁への対応を目的にウェブ上での遠隔地学習を始めており、アジア太平洋地域U3A連携(APA)の設立を後押しするという関係にある。運営委員会(地域バランスを考慮した11名)は毎週ないし隔週に電話会議を行っている。11名はオーストラリア3名、インド2名、ニュージーランド、シンガポール、南アフリカ、モーリシャス、ネパール、日本(大阪)が各1名で、日本については別途論ずるが日本を除くこれらのほとんどがU3A活動に関して自国で主導的な地位にあると思われる。

アジア太平洋地域U3A連携(APA)は、会員制は採用しておらず非公式な集まりであり、参加は自由である。この点で国際協会(AIUTA)と組織的に競合するものではなくAPAのメンバーは重複参加している。APAの柔軟な立場はU3Aのモデルについての考え方にも表れている。すなわち、実際にはイギリスモデルへの親和性が高いのだが公式には特定のU3Aモデルを指定するわけではなく、それぞれの地域事情に応じて最適のモデル化を試みることが強調されている。

ウェブ上での相互訪問によるコミュニケーションのほか、具体的な活動としては毎年国際会議の開催である。会議はこれまでインド(2010年と2012年)、シンガポール(2011年)、オーストラリア(2013年と2015年)、ネパール(2014年)と毎年開かれている。このうち、シンガポールは後述するシンガポールU3Aの母体組織がホストをつとめた。また、この関連で注目されるのは、2016年10月に大阪で開催されたU3A国際会議で、U3A国際協会(AIUTA)とアジア太平洋地域U3A連携(APA)による初の共同開催という形がとられたことである。

APAの位置づけは運営委員会によって2013年2月に南アフリカのダーバンで作成されたU3A-APA MOU(Memorandum of Understanding:覚書)[10]にまとめられている。大目標4項目と具体的目的8項目からなる以下の内容で構成され

ている。

U3A-APA　覚書

大目標

① U3Aの活動グループの創設を推奨する
② アジア太平洋地域におけるすべての地域U3Aおよび国代表U3Aを支援する
③ U3Aの活動を世界全体において推進し、年次大会の広報を行う
④ 個人およびグループによる相互の友愛訪問を推奨する

具体的目的

① U3Aの創設を積極的に推奨し支援する。とくに都市部近郊地域と農村部を重視する
② 創設過程にあるU3Aに向けて、必要に応じて、助言と情報を提供する
③ 激励とケアのため、新しくスタートしたU3Aと定期的なコンタクトを維持する
④ あらゆる機会をとらえメディアを効果的に活用し、国際会議の開催と成功のために尽力する
⑤ 地理的に遠く離れていてもU3A相互の交流を推進するよう可能な限り努める
⑥ グループおよび個人の相互訪問を推奨する
⑦ 相互訪問の活性化のために、協力者のリストを作るよう各U3Aに働きかける
⑧ あらゆる機会をとらえ、U3Aの意義と現実的有効性を伝える

この覚書は、U3A国際協会（AIUTA）とほぼ同様の立場をとりながらアジア太平洋地域におけるU3A活動の拡大と相互の交流促進を表明している。地理的距離の克服にウェブを活用することと、直接一同に会する年次会議の開催広報に主眼がおかれている。しかし、もう少し踏み込んで解釈すると、APAにはアジア太平洋地域という地理的条件だけでなく、先の述べたようにオーストラリア、ニュージーランド、シンガポールといったイギリス連邦諸国が多く参加しているのであり、イギリス型モデルを明確に提示してはいないがインドなどを含めイギリスモデルに親和的なところが多い。事実、先に挙げたアジア太平洋地域U3A連携（APA）の年次国際会議のうちオーストラリア、インド、シンガポールのときにはイギリスU3Aの全国組織Third Age Trustから理事が講演者として派遣されている。

4　U3A共同開催国際会議、2016年大阪

U3A国際協会（AIUTA）とアジア太平洋地域U3A連携（APA）の共同開催による国際会議が大阪南港アジア太平洋トレードセンターを会場に10月11日と12日の二日間にわたって、NPO法人エイジコンサーンジャパンが設立したU3A Osakaという組織が主催者となって開催された。会議の内容は公開されているので、参照できる（http://www.ageconcern-japan.org/u3a/conference2016_reporttop.html）。

同ホームページによると、今回の会議には海外から100名以上、日本から100名近い参加者があった。海外からは13か国から参加があり、17の報告（インド3件、オーストラリア2件、シンガポール2件、他は中国、フランス、スロバキア、アイスランド、イタリア、モーリシャス、イギリス、ポルトガル、スペイン、セネガル）が行われた。報告主体はそれぞれ国際協会（AIUTA）の加盟メンバーであり、そのうちオーストラリア、シンガポール、ホストの日本はAPAのメンバーでもあった。プログラムは、個別報告部分に加え、二日目の午後に二つのパネルディスカッション（テーマは、U3Aの国際的協力、世代間協力）、間にロボット技術の紹介をテーマとする二つのセッションがおかれるというプログラムであった。参加者が一番盛り上がったのは、ロボットのペッパーとのやり取りであった。全体として、国際会議の堅苦しさはなく親睦的な雰囲気で発表以外のところでの交流は活発であった。

報告者と報告内容はさまざまで、実践者もいれば専門的研究者もおり、会議のテーマである「活動的で健康な老いActive and Healthy Ageing」

のもと実践報告、研究報告、それぞれであった。各報告には20分間が割り当てられ、使用言語は英語が多かったがフランス語のものもあった。共に、一応通訳はついていた。

イギリスからは全国組織Third Age Trustの会長が参加していたのだが、彼女の発表時間も他のメンバーと同様に20分間であった。

5　EUエラスムス＋BALLプロジェクト[11)]

大阪会議ではとくに興味を引く報告はなかったのだが、唯一アイスランドの研究者による「ダイナミックなThird Ageに向けて：エラスムス＋BALLプロジェクトによるガイドラインと提言」と題する報告はユニークであった。エラスムスERASMUSとは、The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students の略で、EUの加盟諸国間での大学生を中心とする教育交流を促進するプログラムで、エラスムス＋はその生涯学習版である。BALLは「Be Active through Lifelong Learning（生涯学習を通じてアクティブな生活を）」の略で、国境を越えた生涯学習の推進を目的とするEUエラスムス＋の助成を受けてアイスランド、ポーランド、スペインのU3A国際協会（AIUTA）加盟団体が2014年から2016年にかけて実施した実践的研究である。リーダーは、会議で報告したU3Aレイキャビックの代表で理学博士の学位をもつ。プロジェクトの報告書は、英語、アイスランド語、ポーランド語、スペイン語で公表されている。

このプロジェクトは、50歳以上を対象に退職前学習にあたるところから退職を経てその後の生活を準備するための具体的なアドバイスをまとめており、その骨子は次の3点である。①社会と個人双方にとってのThird Ageの価値と重要性についての認識向上、②人生後期の生き方を準備するために自分の強さ、願望、可能性などを的確に把握できるよう個人に見合った発達学習プログラム（Personal Development Academy）、③各個人がThird Ageにおいて自分にとっての目的を達成するために、あらゆる機会とツールを提供する「機会の倉庫（the Warehouse of Opportunities）」である。

個々の項目をみると特に目新しい事柄があるわけではないが、BALLプロジェクトは3本の軸それぞれについて、実際に活用しようとする人たちがグループを作り、話し合いを進めていくスケジュールと、具体的方法をモジュール（履修単位的なプログラム）として示している。関心ある人たちがファシリテーターとなって実行しやすい内容である。例えば、認識向上ではモジュールは7つに分けられていて、自己管理と年齢管理、社会関係、生活の質、労働市場への積極的参加、経済（金銭面の安定）、情報技術、そして、自由時間の管理がテーマである。各モジュールはシラバス的に構成されているので、話し合うべき内容まで細かく列挙されている。さらに、プレゼンテーション用にパワーポイントのファイルまで参考資料として添付されている。

すべてを紹介する余裕はないので、詳細は公開されているこのプロジェクトの報告書に当たっていただきたい。

提言の中で筆者の目にとまったのは三つ目のthe Warehouse of Opportunitiesという表現である。とくにOpportunities（機会）をWarehouse（倉庫）とつなぐ言葉のセンスの良さを感じたのであるが、その内容とするところのユニークさを予感させたのである。ここでいう倉庫はインターネット上のヴァーチャルな空間で、実際の倉庫のように大棚、小棚からなる階層的な構成になっている。報告書は直接集う形態も推奨してはいるが、モデルはウェブ上で構築されている。

機会の倉庫は二部構成になっていて、それぞれチャート図にまとめられている。提言の全体をヴィジュアルに示したものであり、テーマ別モジュールからこの図の対応箇所に進むことができる。第一部は、大棚には「金融財産の実践知識」「情報とコミュニケーション技術」「権利と責務」

「新しいスキルとキャリア」の４つが配置され、図に示したように各大棚から中棚へ、そして、小棚へとつながる場合と小棚だけのものに分かれる。「金融財産の実践知識」のは、相談、学習コース、情報の３つの中棚があり、そのうちの相談については年金生活、住宅不動産、法律金融相談の３つの小棚がついている。

第二部は大棚が「関係と仲間づくり」「ライフスタイルのスキル」「健康と身体的活動／運動」「文化」「余暇」「趣味」の６つで構成され、最初の二つは中棚と小棚に分かれての構成、他の４つは中棚抜きで小棚項目に直接つながっている。

理解しやすい内容なので流し読み風になってしまいがちだが、重要なのはこの形にまとめる方法でありそのプロセス、つまり、方法論である。BALLプロジェクトのチームは、EU３か国、すなわち、アイスランドのNPO法人とレイキャビックU3Aの２団体、ポーランドのLublin U3A、そして、スペインのAlicante大学が開発したU3Aプログラムから構成された。アイスランドのNPO法人以外は、すべてU3A国際協会の会員であり、U3Aの国際的ネットワークにも参加している。専門的研究者ではなくU3Aの活動に参加経験の豊かなメンバーが主導したプロジェクトであり、退職前から退職後に向けてのライフスタイルの確立に向けての具体的なテーマを数多くの話し合いから抽出し、それらを体系的にまとめていった実践的研究の好例である。

こうした方法論の強みは、提言が実践しやすいかたちでまとめられているところにある。

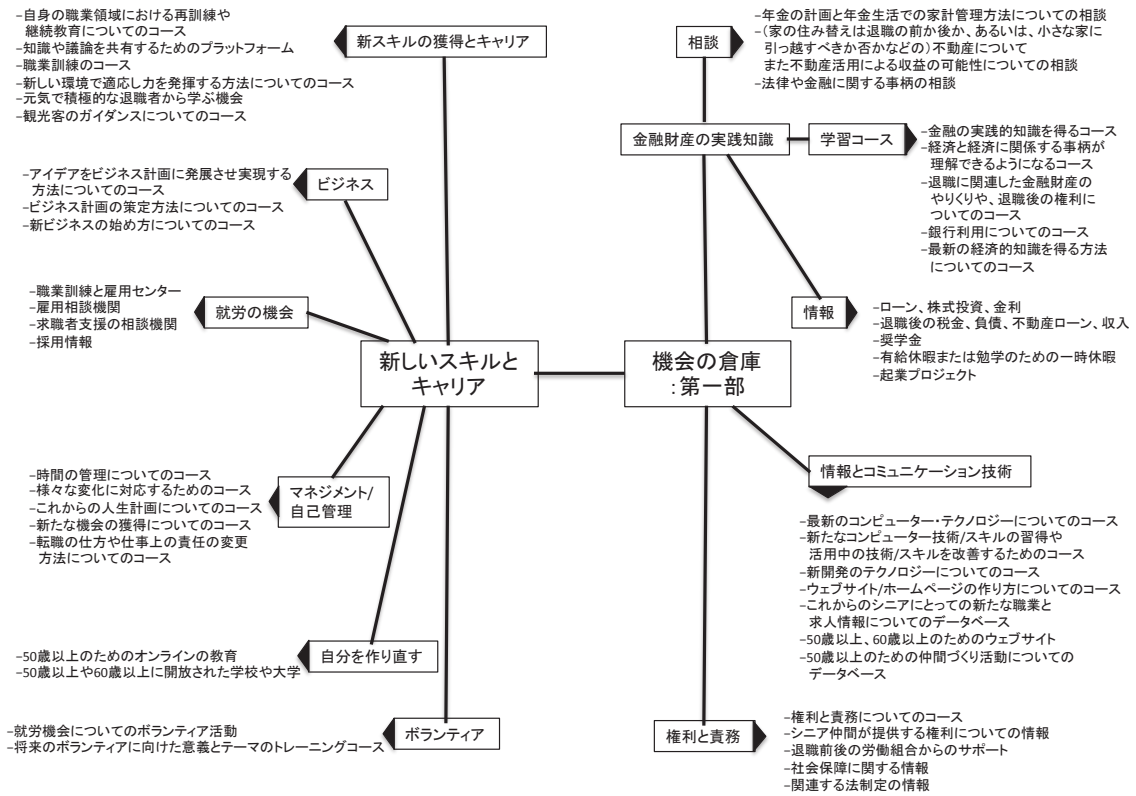

図１　機会の倉庫：第一部（BALLプロジェクト報告、64-65頁）

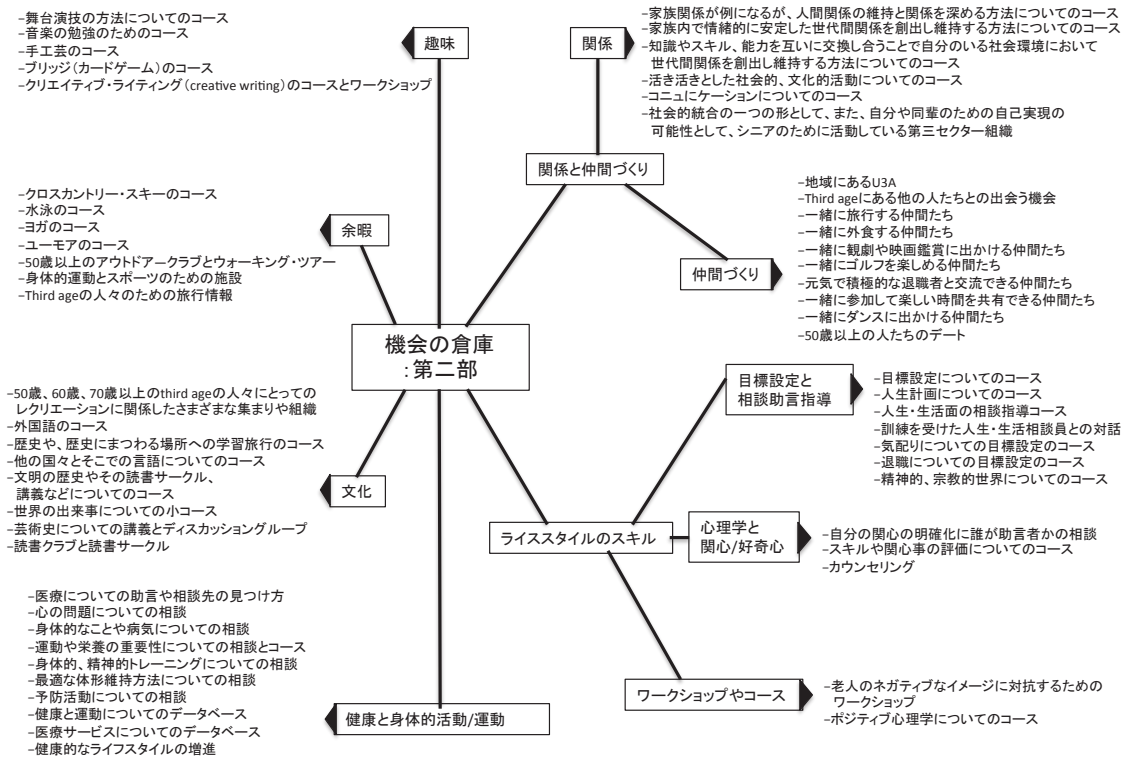

図２　機会の倉庫：第二部（BALLプロジェクト報告、66-67頁）

報告書を読むと提言をまとめるために試行実験を多く行っていて、スペインでは地域だけでなく地方や国のレベルでの担当者の集まりで報告しその反応を確かめている。つまり、テーマの選定やその構成、参加しやすい集まりのもち方などグループワーク的な試みを重ねている。細かいところまで配慮され、具体的な進め方がモジュールで示されているので活用がしやすいのである。

機会の倉庫はここで提示されたものが完成形なのではなく、国により、また地域によって独自の社会文化的背景があるのでそれぞれの単位に応じて修正を加えつつ最適な内容にするのが望ましいとされる。この関連で、EUを意識してのことだと思われるが、国外での機会について詳しく情報提供することが推奨されている。

6　シンガポールU3A

シンガポールは東京23区とほぼ同じ広さの小国であるが、近代的都市国家として経済、科学技術、研究教育面でアジア太平洋地域で存在感を高めつつある、活気にあふれた国である。マレーシアからの独立が1965年、2015年に建国50周年を迎えた。多民族・移民国家で、民族背景では中国系74.3%、マレー系13.4%、インド系9.1%を占める（2016年現在、以下同じ）。人口は約561万人で、このうち国籍保有者と永住権保有者は393万人、約70%である。全住民の高齢化率は12.4%である。

シンガポールU3Aの正式な設立は2014年3月31日であるが、2012年から準備が進められ同年12月にはU3A国際協会（AIUTA）に加盟して

いる。会員数は2017年3月時点で約650人ほどである。Learning Communities（学び合うコミュニティ）という概念を掲げている。新しい組織であるが、AIUTAの加盟だけでなく、アジア太平洋地域のU3Aのネットワークである APA（Asia Pacific Alliance）にも参加している。2016年10月に大阪でAIUTAとAPAにより共同開催された会議にもGoh会長を団長に主要メンバー10名ほどが参加している。筆者がシンガポールU3Aの人たちと直接会ったのはこの時が最初であった。

これまでみてきたようにU3Aの国際展開は、フランスに始まり多様な形態と緩やかな連携を特徴にシニア層の学習・教育活動を推奨するU3A国際協会と、政府等の公的援助を受けず自律的運営を特徴とするイギリスにおけるU3Aの二つのモデルを軸に展開している。イギリスモデルは理念の明確さと運営方法の確立によりイギリスで大きな成功を収めさらに拡大しているので、その実績はイギリス連邦諸国を中心にイギリス以外においてモデルとして踏襲される傾向にあり、アジア太平洋地域ではオーストラリア、ニュージーランドがこの方向での主導的役割を果たしている。他方、同地域ではU3A国際協会の主要加盟国となった中国が中央政府主導のもと活発な展開を見せており、6万強の「老年大学」と760万人強の会員数という巨大規模になっている[12)]。

こうした背景のもと大阪会議での印象から、シンガポールU3Aは自律性を特徴とするイギリス型U3Aと親和性をもちつつ、政府の高齢者学習支援政策との連携も重視し、独自のモデル化を実験中のように思えた。イギリス型とフランス型の両軸に対しても距離感がよいのである。ただ、モデル、型という言い方を便宜的にしているのだが、この表現はイギリス型には的確にあてはまるが、フランス型はシニアの学習・教育活動を推奨する点のみを共通項に非常に多様な形態を包摂しているのでそれらをひとまとめに表現するものであり、モデルといっても両者は密度が大きく異なる。他方で、それぞれの国と社会は特有の背景や条件があるのも事実であるから、これは択一的な問題ではなく実際には両タイプの組み合わせとなる。そこからU3Aの国際的展開の可能性が見えてくるはずであるが、現状ではほとんど研究が進んでいないと思われる。

シンガポールは、次のような特性をもっている。第一に、シンガポールは多民族国家で文化的多様性が顕著である。今後のU3Aの国際展開において文化的多様性が重要な要素となるが、シンガポールはいわばそれを与件としたところからスタートしている。第二に、U3Aは教育歴や社会経済的背景においてミドルクラス層の退職者をターゲットに立ち上げられている傾向があるのだが、シンガポールは都市型国家としてこの条件が醸成されている。第三には、シニアを対象とするU3Aの活動にあってシンガポールU3Aは若年世代、とくに若者との世代間交流を視野にいれている。

設立の経緯と組織間関係

シンガポールU3Aは、単体で設立されたのではなく母体をもっている。SACE（Singapore Association of Continuing Education）という、20歳以上を対象にした成人教育、生涯教育を推進する民間非営利の組織がその母体であり、歴史は古く1979年の設立である。1987年には慈善団体法 The Charities Actに基づき非営利慈善団体の承認を受けている。ただ、SACEの活動は多少の変動はあるものの長い間低迷状態にあったそうであるが、2014年に50歳以上を対象にU3Aを設立する。したがって、SACEとシンガポールU3Aは組織的には親子関係のようなものである。

SACEは会員制で入会金が50ドル（シンガポールドル、以下同じ）、約4,000円（1ドル約80円）、年会費が30ドル（5年間分一括前払いで100ドル）で、このうち50歳以上の人は自動的にU3Aの会員となる。このためU3Aも会員制ではあるが現在会費は徴収していない。

SkillsFuture Credit Programm

シンガポールは2015年に建国50周年を迎えたのであるが、この機会にSkillsFuture Creditと呼ばれるプログラムを開始した。2015年を準備期間とし、2016年1月1日から実施となった。初年度が終わり、現地フィールドワークを行った2017年3月は、その実績が報告されつつあった。このプログラムは名前からうかがえるように25歳以上を対象に職業的スキルの新規習得やスキルアップを奨励、支援する施策でシンガポール労働人材開発庁（Workforce Development Agency）が所管する。シンガポール国籍保有者と永住権保有者が対象であるが、該当者全員に2016年、500ドルの研修受講補助枠が割り当てられた。枠であり、この額が個人に支給されるわけではない。政府の認可を受けた組織や団体が提供するコース/科目を受講する際にその受講料が500ドル枠から差し引かれ枠内であれば実質無料で受講でき、提供側にその額が政府から振り込まれるという仕組みである。個人が自己負担で受講料を支払った場合は、ウェブ上での申請によりその額が政府から払い戻される。つまり、500ドルを上限に無料で技術のトレーニングや特定知識の習得ができる奨励策であり、権利はあっても受講しなければメリットはない。ただ、この500ドルには有効期限はなく、2017年以降も加算される計画となっている。大学の授業料などにも充当できるので、一定額に達するまで貯めておくこともできる。若者は25歳になった年から500ドルの補助枠を活用できる。

変動する産業構造、労働市場に対応できる労働力の質の向上が個人にとっても社会にとっても重要であり今後のシンガポールの目指す方向であるという位置づけであるから、主眼は職業訓練関係にあり、コンピューター関連の情報化や電子化などの先端領域、工業技術や調理などの従来からの領域のコースや科目が多い。その一方で、成人教育、生涯学習も重視され、新しい知識の習得や生き方、ライフスタイルに資する教養関係の内容も含まれる。

ちなみに、個人単位のこうした施策展開はシンガポールならではとも言え、社会保障制度の一環としての強制的老後貯蓄口座制度を運用していることがベースにあると考えられる。

SkillsFuture Creditは25歳以上を対象とするので、当然50歳以上の人たちもこのプログラムを活用できる。成人教育、生涯学習の推進を目的とするSACEにとってこの状況は低迷状態から脱却する好機となり、その勢いがU3Aの初期態勢の確立を導くという展開になる。しかし、シニアを対象にしたコース/科目の提供はSACEだけではなく40前後の他の組織や団体もこの制度に参加しているので相互の連携と同時に、受講者獲得を巡って競合関係にある。そのため提供側をまとめるために2015年にNSA（National Silver Academy）という民間の上位組織が創られ、国の機関であるC3A（Council of the Third Age）のもとにおかれた。

NSAは、高等教育機関（10年の義務教育以降の職業訓練校、短大、大学など）と非営利福祉団体で構成されているネットワークで、シニアへの学習機会の提供を目的とする。

個人負担なしのこの補助策が引き金となり、50歳以上の人たちの学習や教育に対する潜在的ニーズが顕在化し、シニアの学びの動きが起きた。むろん関心のない人々もいるが、少なくとも潜在的に関心のある人たちに対しては有効な誘因となったと考えられる。

初年度、2016年の実績は、SkillsFuture Credit全体として126,000人以上がこの制度を利用し、そのうち約63%は40歳以上であった[13]。統計上40歳以上のくくりになっているのでシニア層（50歳以上）あるいは退職者層の比率はわからない。

SACEとU3Aの提供科目/プログラム[14]

以上みてきたように、SACEとU3Aと組織間関係の要諦は国の施策に基づきコース/科目を提

供しているSACEの受講者はほぼ50歳以上であり、実質その全員がU3Aにも参加する点にある。SACEの会員は2015年3月末の310人からSkillsFuture Creditプログラムが始まった3か月後の2016年3月末には509名に急増している。参加は個人の選択であるから、SACEを受講したシニアでもU3Aに参加しないことも可能だし、U3Aだけに参加ということもありうるが、こうした例については聞かれなかった。両方とも会員制であるが、SACEからU3Aへの参加者からは会費は徴収していない。ハイキングなどの場合の実費負担のみである。

また、SACEの役員12名のうち半数はU3Aの役員も兼ねており、写真撮影、映画鑑賞、自然散策など主要プログラムについてU3A内での担当役割が決まっている。大きな特徴として全員がローターリークラブのメンバー歴が長く、SACEとU3A双方の会長であるGoh氏の温厚な人柄でまとまっている結束の強い人間関係がある。

SACEは現在3か所の活動場所をもっており、最も広いのがチャイナタウンの場所で、筆者が調査を行ったPeninsula Plazaという大きなビル内のオフィスは二か月前から使用している。いわゆるオフィスビルでSACEのオフィスは6階にあり受付スペースと約5、60㎡の部屋があり、ここで講座やアクティビティが行われている。このフロアーはコミュニティ活動関係の団体が多いように思われ、しっかりとしたパーティションで各オフィスが区切られている。SACEの場所であるが、競合しない時間帯にU3Aの集まりにも利用されている。ただ、日常の運営はすべてボランティアのみであり、役員たちも事務所受付などスケジュールを決めて担当に入っている。

したがって、組織間関係、実際の活動においても親子的というか一体的である。

SACEが2015年4月から12月に開講したコースは「SG50 Lifelong Learning Courses for Seniors（シンガポール50　シニアのための生涯学習コース）」と名付けられ、次の12コースで構成され延べ800人強のシニアが受講した。このコースは先述の政府機関C3A（Council for the Third Age）と、シンガポール・ロータリークラブ財団をパートナーとして実施された。

内容を加味してそれぞれのコースを紹介すると、次のようになる。①気功瞑想術、②Third Agersのための応用心理学、③自己理解を高める心のもち方、④ビデオ自分史、⑤美術・芸術鑑賞ツアー、⑥小規模ビジネスの立ち上げ、⑦知的活性化で脳を鍛える、⑧ライフストーリーの書き直しによる人生の意味の再発見、⑨老いの変化を受け入れつつ創造性を発揮する、⑩老年期における対人関係の調整、⑪老いの情緒的、心理社会学的現実、そして、⑫劇作への誘い、である。コースによって実施期間には長短がある。ほとんどが半日単位で週一回、4回から8回のパターンであるが、最短は⑦（脳を鍛える）の半日を二回、最長は②（応用心理学）で週一回、半日ではなく一日を使って計9回となっている。2016年実績では、受講者数は最少コースで22人、最大は167人で、合計すると延べ803人であった。

当然受講料も連動し、2017年のプログラムで見ると最短コースは22.40ドル、最長コースは208.00ドル、ほとんどは40ドルから60ドル台となっている。2016年実績では234,000ドル強（約1,900万円）の補助額が収入となっている。SACEの財源は一挙に拡大し、U3Aを含め安定的な活動ができるようになった。ところで、すでに述べたように、SkillsFuture Creditにより500ドル以内であれば自己負担なく受講できる。例外は⑤（鑑賞ツアー）と⑧（ライフストーリーの書き直し）で補助対象のコース認定を受けられなかったのではないかと考えられるが、SACEとして独自に開講している。講師は外部の専門家であるが、②（応用心理学）は会長、⑥（小規模ビジネスの立ち上げ）は自身が成功した事業家である副会長が講師を務めている。

ちなみに講師の呼称であるが、SkillsFuture Creditを意識してと思われるがtrainersという言

い方をしている。

SACEのコース案内はSACEのウェブサイトや紙媒体のニューズレターなどだけでなく、U3Aの方でも同様にウェブと紙媒体で流される。

なお、2017年はコース全体の名称が「National Silver Academy Short Courses by SACE-2017」となっており、NSAの承認のもとにSACEが実施するという関係が明確になっている。「退職後のファイナンシャル・プランニング」と「合唱ヴォイストレーニング」、そして「舞台演劇の演技スキル」の三つが新規コースで追加されている。

筆者は調査で滞在していた2017年3月14日に、この「演技スキル」コースの初回を見学することができた。講師はインド系の女性で、テレビドラマなどでシンガポールでは誰もが知っている著名な女優さんという説明であった。半日単位で計8回のコースですでに定員に達し3名が待機リストということなので人気は高い。初回のためかSACEとU3A双方の会長Goh氏とインド系の理事の女性も参加していたので、この日の受講者は合計17名。30歳くらいの男性が1名、全体で男性は4名で、受講者は全員が中国系であった。50歳以上が対象のコースではあるが、SkillsFuture Creditを使えば25歳以上であれば受講できるから、若い男性も参加していたことになる。14:30から18：00までの3時間半の長さで全部を見学することはできなかったが、講師を中心に受講者は半円形にパイプ椅子に座り、講師の問いかけに応える形で進んでいった。ベテランの舞台女優らしく、声に力のある話し方である。初めに自身の演劇経験をエピソード的に話しながら、役を演ずるとはどういうことかをテーマにしたやり取りに入っていった。受講者の背景はわからないので身なりや話し方、その内容などから、かなり多様な人たちの集まりと思えた。講師の問いかけを十分理解できていないように思える人やキリスト教の信仰が強くすべてをその文脈で述べる人などいろいろであって、グループをまとめていくのは少しむずかしいようであった。

講師は自分が経験した役柄を紹介しつつ、役割を演ずるとはその都度ひとつの世界の中の存在となることで、それは自分の身体と心と魂とが一体となることであり、この一体性は演劇の世界だけのことではなく私たちが生きていくうえでもあてはまる。このコースで演技として練習することで一体感覚を学び、日々の生き方を豊かにしていける、といった内容のようであった。二回目以降の内容はわからないが、受講者はこの練習をしていくことになる。

一方、U3Aシンガポールの方であるが、2015年の主な活動は次の8つにまとめられる。

① 自然ハイキング。月一回、日曜の午後に10人から30人のグループで自然散策、ハイキングでシンガポールのさまざまなところに出かける。コーディネーターはU3Aの役員の人で、彼一人で計画策定、そのための下見、募集、そして、当日のガイドまですべてを行っている。

② 写真撮影。ファシリテーターは映画製作・写真・オーディオに熱心なSACEの役員で、月一回の頻度で、ポートレート撮影、夜間撮影などテーマを決めて写真撮影について学習会を開いている。参加者は自分で撮った写真を持ち寄り、ファシリテーターにコメントしてもらうこともできる。

③ 映画鑑賞。映画やビデオ作品を一緒に見て、互いに感想を話し合うことで多様な視点を学び人間や社会についての洞察を深める。鑑賞する作品はファシリテーターが選ぶが、参加者が提案することもある。

④ ラミキューブのゲーム。認知症予防のためにシンガポールのロータリークラブがSACEと一緒に紹介、導入したラミキューブというゲームを行う。毎月第一、第三土曜に開いている。この集まりはボランティアの一人が担当している。

⑤ 食べ歩き。毎月一回をめどにお昼か夕食に食べ歩きをするプログラムである。

⑥　生活と健康トーク。健康についても幅広く学ぶためにゲストを招いて話を聴く。

⑦　カフェで話し合い。インフォーマルな設定で、トピックを決めずに自由に話し合う活動。不定期に開催。

⑧　海外旅行。①（自然ハイキング）のコーディネーターが計画する隣国マレーシアへの一泊グループ旅行で、ラミキューブのゲームやカラオケで親睦を図り、観光名所を訪れる。初回の参加者は17名であったが好評で評判となり、二回目も実施したところ倍の参加者となった。

これらの内容からわかるように会員の交流、親睦を目的としたアクティビティ・プログラムで、会員の友人なども参加できる。SACEのコースが学習型で展開しているので、現在のところU3Aのアクティビティ中心の活動とすみ分けをしている。コーディネーターやファシリテーターも役員が担当していて、上記8つのうち①と⑧は同じ人であり、⑤はSACEの事務局長で、彼らはSACEとU3Aの会長であるGoh氏の依頼で担当を引き受けている。特技、性格などを的確に把握して役割を依頼しているGoh氏のセンスの良さが、関係者から多く聞かれ、氏の人望がうかがえた。

シンガポールU3Aの位置づけ

SACEと一体ではあるものの、シンガポールU3Aの単独での立場表明では、Peter Laslettの提示によるケンブリッジモデル（イギリスモデルではなく、この言い方をしている）に立脚し「Learning Communities（学び合いのコミュニティ）」を独自コンセプトとして掲げている[15]。活動理念は、ボランティア精神、学ぶ楽しさ、定額負担を柱に、それぞれ3項目、2項目、1項目を具体的に示している。

ボランティア精神：

1　会員は自ら学ぶとともに、他の人たちが学ぶことを手助けする。教える人もまた学び、学ぶ人もまた教える。

2　会員はできる範囲で、シンガポールU3Aの行うイベントや活動をボランティアとして支援する。

3　会員はコースの実施や他のサービスの提供に従事することによりいかなる金銭的報酬も受けない。

学ぶ楽しさ：

4　学び合いのコミュニティに加わるにはアカデミックな資格は必要ない。試験の制度もなく、学位や卒業証書、修了証は授与しない。

5　学習活動は興味深く、楽しく、リラックスした雰囲気で行えるよう、全員で努力し合う。

定額負担：

6　会費やコース受講料は参加が妨げられないレベルに設定される。支払いが困難な人には特別な配慮を行う。すべての会員は「U3A学び合いのコミュニティ」において最低一つのコースか活動に参加する。

基本的にはLaslettの目的と原則（木下、2018）が踏まえられており、特に最初の4つの項目はそのままかそれに近い引用で、5と6で独自性が強調されている。これらは設立時の表明であり、まだフル稼働の実践段階には至っていない。

むしろ現段階で注目されるのは、SACEと同様にシンガポールU3Aは役員、会員ともほとんどが中国系であるが役員にはイギリス出身者とインド系の人が入っており、使用言語を英語に限定していることの意味である。シンガポールの国語はマレー語であるが、公用語は英語、中国語、マレー語、タミール語である。英語に限定している理由は、中国系だけでなく他の民族背景の人たちも参加しやすくするためであり、SACEにおいてはSkillsFuture Creditプログラムで50歳以上を主体とするコースの提供団体が約40も存在し競合関係にもあるから独自色を打ち出す必要があることと、他方、U3Aに関しては中国系だけに閉じた組織にしないためである。つまり、英語使用は活動理念にかかわる選択なのである。加えて、U3Aにとっての戦略的な理由も考えられる。イギリスモデルの特徴であるがU3Aの活動はミドルクラスのシニア層の参加により成功しているの

であり、シンガポールにおいてもこの層は英語を介して参加しやすく知的好奇心も旺盛な人たちだからである。SACEとU3Aがシンガポール国内のロータリークラブの人間関係からリーダー層を形成していることも考慮すると英語に限定する狙いはわかりやすい。

これまでみてきたようにSACEにとってもU3Aにとっても当面の課題は新規参加者の確保であり、とくにSACEにとっては政府の補助制度のSkillsFuture Creditの活用によるコース受講者の増大が具体的なターゲットになる。ウェブサイトを中心に広報に力を入れているが、この関連で特筆すべきは3月下旬（2017年は3月25、26日）に開催される「50+ Expo」と呼ばれる生涯学習を推奨する官民合同での大規模なイベントである。C3A（Council for the Third Age）が2013年から毎年開催していて、関連団体は個々にブースを割り当てられ、そこで活動のPRと勧誘を行う。CASEはC3Aのパートナーとして毎年参加してきている。このイベントには二日間で一万人ほどが訪れるという話であった。2015年のExpoではSACE/U3A（既述のように同時加入となる）は100人以上の新規会員を確保し、SACEのコースへの受講登録も多く受け付けることができた。

50+ExpoにはSACEとU3Aは一体でブースを出すが、勧誘の重要な機会になるので事前の準備に力が入ることになる。筆者は調査スケジュールの関係で2017年のイベントには参加できなかったが、3月14日にSACEのオフィスで行われた準備会議を傍聴させてもらった。会長、事務局長、先に挙げた①と⑧のコーディネーターをしている男性ともう一人で、当日までの準備と当日の段取りの確認、そして、できるだけ多くの人をブースに引き付ける目玉企画が話し合われた。今回は昨年の100人を大きく上回る300人の獲得を目標に掲げ、作戦としてくじ引きでラミキューブのゲームセットを賞品にすることはすでに決まっていて、この時の話は賞品の数をめぐってであった。狙いはこうである。くじ引きは所定のフォームに氏名と連絡先を記入してもらう形で受け付けるので、応募時と抽選結果発表時に同じ人が二回ブースに来てくれること、また、SACEの実施するSkillsFuture CreditコースやU3Aについての案内を後日送信、送付するための連絡先情報が得られるからである。この背景にはシンガポールでも個人情報の扱いが厳密になってきていることがある。

政府の施策をブースターとして発進し始めたところであるが、シンガポールU3Aの今後の展開は定点観測に値する。中国などとは異なり、オーストラリアやニュージーランドとも少し距離をおいたアジアにおける一つのモデルが形成される可能性がある。

7　U3A運動と日本におけるシニア学習活動との接続困難性

最後に、U3A運動の国際展開からみたときの日本の位置について述べておく必要があろう。奇妙なアンバランスというとらえ方ができるように思われる。日本におけるシニアの学びと教育の現状は、1963年の老人福祉法に基づく全国の地方自治体が始めたいわゆる老人大学の時代から高齢化の伸展を受けてカルチャーセンターなどの商業プログラムから高等教育機関の関わり、さらには、高齢市民の参加を積極的に組み込む形での市民大学の変貌など、質量両面で国際的にみても優れた実績が蓄積されてきている。

その一方で、日本でのこうした展開は、おそらく研究者などを別にすれば、国際的にはほとんど知られていないといえよう。U3A国際協会、イギリスU3Aの全国組織Third Age Trust、その他の関連国際ネットワークはU3Aの視点から日本の現状を理解しようとすることになるから、日本でU3Aを名乗る団体「U3A Japan」という大阪にある1団体に行きつくことになる。そして、この名称がミスリーディングする可能性もあり、

この団体が日本におけるシニアの学習活動を代表するところと理解されかねない。緩やかな加盟条件であるが、他にU3A国際協会に加盟している団体が国内にないからである。逆に言えば、地方自治体が支援して実施されている多くの市民大学や大学に併設されている生涯学習プログラム等はそれぞれに閉じているため組織や制度の枠を超えたシニアの学習活動自体への関心も、その国際的展開状況に関してまだ関心がないということであろう。

ところで、このU3A Japanという団体はホームページ（http://www.ageconcern-japan.org/u3a/index.html）によると、NPO法人エイジコンサーンにより2014年に設立され会員数550名、書道、英会話、コンピューター、絵画、園芸、編み物などの教室活動を行っている。活動内容からみると日本で数多く行われているものの一つといえるが、U3Aを取り入れたロゴを作り、商法登録している。

また、これまでU3Aの活動については一部の専門家や研究者などの範囲に限られ、一般にはあまり紹介されてこなかった。しかし、日本の現状とU3Aの国際的な展開は以前にもまして現在の方が相互の連携が可能かつ必要になっている。

翻って考えるに、University of the Third Age, U3Aは、その多様性を抱えながら現在、世界的にシニアの学びを代表し、象徴する共通キーワードになっており、世界のどこであってもこの言葉を共有することで瞬時にネットワークに入れ、仲間になれる。その世界がすでに形成されている。今後国際交流を進めるうえでこの点は理解される必要がある。Laslettのテーゼを引き合いに出すまでもなく、シニアの学びが拓かれていく可能性は常にオープンであるべきでその自発的活動に制限をかけるようなことがあってはならない。そのためには、U3Aの歴史と実態に関して理解が広がる必要がある。

参考文献

木下　康仁　2018　『シニア　学びの群像：定年後ライフスタイルの創出』弘文堂

Laslett, Peter　1989/1991　*A Fresh Map of Life: The Emergence of the Third Age*, Harvard University Press

参照URL

http://www.skillsfuture.sg/　accessed on March 26th, 2017（このプログラムのHP）

注

1）本稿は、科学研究費、基盤（C）「高齢者の学習・教育プログラムのタイプ別比較と実践モデルの提示」（課題番号16k04203：2016-2018、代表、木下康仁）の成果の一部である。

2）http://www.aiu3a.com/origins.html　2017年3月6日アクセス

3）http://www.worldu3a.org/worldpapers/vellas-uk.htm　2017年3月6日アクセス

4）http://u3a.sg/about-u3a/　2017年3月10日アクセス

5）McCannah, Ian, 2015 Key features of the Third Age Trusts :International U3A Links, report of International Committee

6）景徳鎮老年大学学長、楊啓村氏の報告。2016年10月11日、AIUTA・APA国際会議、大阪。

7）http://www.aiu3a.com/application%20form(eng).html accessed on April 9, 2017

8）http://www.aiuta.com　アクセス：2017年2月4日

9）http://u3a-asiapacificalliance.org/apabeginning.pdf　accessed on April 7, 2017

10）http://u3a-asiapacificalliance.org/apa-mou.pdf accessed on April 7, 2017

11）http://www.ball-project.eu/

12）景徳鎮老年大学学長、楊啓村氏の報告。2016年10月11日、AIUTA・APA国際会議、大阪。

13）Council of the Third Age, Ministry of Health, のホームページ。
http://www.c3a.org.sg/Aboutus_process.do accessed on March 27th, 2017

14）SACE（The Singapore Association for Continuing

Education), Annual Report 2015-2016
15) http://u3a.sg/about-u3a/ accessed on March 29th, 2017